

---

# 異世界召喚？嫁を連れ戻せ！

春夕

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界召喚？嫁を連れ戻せ！

### 【Nコード】

N2950S

### 【作者名】

春夕

### 【あらすじ】

嫁が異世界に召喚されてしまった、旦那の嫁を呼び戻すために東奔西走するお話。ただし旦那は何の特殊能力もない唯の一般人。嫁のトラブルに巻き込まれて得た知識と人脈で何とか嫁を呼び戻そうとするが？

風…風が吹いている。

朝の光が差し込む部屋に、涼やかな春の風が流れ込んできている。

……というか、涼やかなんてものではなく……

……寒い……

……とてつもなく寒い……

「……なんで窓が開いてるんだ？」

そついいながら、ベットから体を起こし窓際へ向かう。

すでに白い息が出るほどに気温が落ち、手足が震えるほどだ。

窓際までの距離が、遠く感じる程に下がった部屋の温度に頭が痛くなる。

ふと気づくと、ベット横の机の上から振動音が……。

ただ携帯がマナーモードなだけだ。

窓を閉めて暖房をつけてから、携帯を手に取り確認する。

着信は嫁の携帯からだ。

？

同じ屋根の下にいる嫁から、なぜ電話がかかってくる？

振動し続ける携帯の時間表示は午前7時だ。

この時間なら、朝食の準備をしているはずだ。

とりあえず、電話に出てみよう。

「もしもし？」

「あーやっとなってくれた！」

嫁のうれしそうな声が聞こえるが、なんだか厭な予感しかしないのはなぜだろう？

「落ち着いて聞いてね？どうも私、異世界に召喚されたみたいなの

！」

………はい？

「すまん。もう一度頼めるか？」

嫁の説明は簡潔だった。

だが、もう一度聞いておかねばなるまい。

「うん、いいよ。異世界に召喚されちゃった！」

今のおれの感想はただひとつ。

” どうしてこうなった！”

くプロローグ

この嫁は天然ボケではあるが、頭が悪いわけではない。

むしろ、おれよりもかなり頭がいい。

それを発揮することがないだけで。

その嫁が” 自分は異世界に飛ばされた” といっている。

「……順を追って説明してくれないか？意味がわからんぞ？」

いきなり異世界に飛ばされたと言われても、何がなんだかわから  
ん。

「えつとねえ、朝起きたら見知らぬ土地にいたの……」

今は突っ込みはなし。嫁が何を言いたいのか、しっかり聞き逃さ  
ないようにしなければならぬ。

「フムフム、それで？」

続きを促しながら、見知らぬ土地とメモ帳に書き込む。

いつも持ち歩いているメモ帳とペンは、嫁と一緒に生活するには  
必需品だ。

おれ自身は頭が悪い。

物事を整理するときにはメモを使うのだが、特に嫁の話は整理さ  
れていないことが多いので必ずメモを取るようになっている。

「ええつと……金色の女の子に薄暗い神殿に連れて行かれて、勇者  
になってくれて言われた？」

「なぜ疑問系？つて、勇者だ！？」

うん、本当は突っ込みたいんですけどよ？ただね、突っ込むと話が拗れる事の方が多いんだよね……。

「知らないわよ？どうでもいいし。ぶっちゃけ勇者なんてめんどくさいものにはなりたくないもの」

相変わらずのめんどくさがりである。

「ああ、話の腰を折ったな。すまない」

こういうときは、素直に謝っておかないと長くなるからな。

「神殿とか言ってたな？どんな神殿だ？」

なんとなく、携帯の向こうでちよつと不機嫌になっている嫁の顔が想像できてちよつと安心した。

「……光の女神を崇める神殿だって。この国の神官達が勇者召喚の儀式をして、私が女神様に連れてこられたってことみたい」

ふむふむ、光の女神を崇める神殿なのに薄暗い？

なんだか納得いかない。だが、それは横に置く。

「次に最初の見知らぬ場所について教えてくれるか？」

「うん。すごく大きな……高層ビルって言うのかな？そんな感じの木があつて、その木を囲むように立つ建物があるの。その木のある場所に仰向けに寝てたの」

まさしく見知らぬ場所だな。

なんとなく想像ついていたが、うちの嫁は巻き込まれ体質な上におれを巻き込む厄介な奴だ。

今までそれで、どれだけ苦労してきたかわからない。

「ふむ、金色の少女とはどんな子だ？」

「……」

無言……なんだ？説明したくない理由でもあるのか？

「黙るな」

俺の言葉に数秒の間さらに沈黙して、返答があつた。

「……きれいな金髪のツインテールで紅い瞳のかわいい女の子……」

ああ、なんとなくわかってしまった、わかりたくないのにわかってしまった。

うちの嫁はかわいって単語に非常にコンプレックスがある。身長が高く、声も少し低めで男っぽい格好をしていることが多いのでかわいって言われるよりも、かっこいいって言われることが多かったらしい。

それゆえに”かわいい”とおれに説明するのが嫌だったらしい。

「……本当にお前はかわいい奴だな」

「……」

ああ、絶対に今電話口で真っ赤になってる。

こつこつとこが良いな。などと惚気ている場合でもないか。

「というこで、その子の立場なんかを教えてもらおうとっれしいかな？」

おれの言葉に、説明すべきことを誤ったことに嫁は気づいたのだろう。

たぶんまた電話口で顔の赤さが増したんだろうな。

「う、うん。その子はその神殿で姫巫女？っていう役職で、神官長よりも偉いらしいの」

姫巫女……たしか、うちの嫁さんもうちの神社の姫巫女だったよ  
うな……

「それで、勇者召喚の儀式でブースター役？をやったらしいの」  
ブースター？……増幅器ってことか？なんの？

メモメモ……言っただけですか？

「なに？このラノベ的展開……」

「うん、だから異世界だよ！すごいよね異世界！」

なんだか興奮しているが、お前の感性がよくわからん。  
今すぐくのつぴきならない事態ですからね？

その辺理解してる？いや、考えてないよな……

「……えっと……もう切っただけか？」

「なんでよー！」

たった十分程度の電話でものすごい疲れたよ……。

実はその間に移動して、家の中に実際嫁がいないかどうか、確認

してみた。

ほんとにいないし……部屋の様子を見た感じでは外出した様子もない。

玄関に靴もそのままだったしな。

自作自演説はすでに消滅してる。

「寝ている間にそつちにトンだつて形でいいのかな？」

「たぶんそうだと思う。昨日の夜までの記憶しかないし」

「まず間違いないか……後は確認しなきゃならないことは……。」

「女神つてのはどんな神様なんだ？」

「わかんない。その辺の説明はなかった」

「ふむふむ、大体状況はわかったな。」

「とりあえず、おれの至った推測を話す。当たってれば静かに聞いてくれるか？」

「うん」

いつものように素直に返事をくれる嫁に少し苦笑しつつ、おれはおれの推理を話し始める。

「お前が目覚めた場所は、その世界もしくはその国における重要な場所。んで、お前はその場所で行われた勇者召喚という名の拉致被害にあった」

「うん、間違いないし的確だね」

ああ、嫁の苦笑いが……想像したらだんだん腹立ってきた。

冷静に……よし！話を続けるぞ！

「目覚めたら傍らには金髪の少女がいて、その少女から説明を受けた。周囲にはほかに人はいなかっただろ？」

一応確認してみる。おそらく間違いないはずだ。

「……確かに誰もいなかったな」

「やっぱり……なんかおれの悪い予感あたりそうだ……。」

「んで、ここからは完全に憶測だが、その少女からの説明には勇者として戦って使命または目的を達成しない限りもとの世界に戻れないとか説明された」

「すごい！そこまで想像できるんだ……」

ため息すらつけないな……なんて愚かなんだその神官たちは……自分たちが召喚した人間がどれだけの爆弾か理解してない……。

「でだ、その使命または目的に関してはほかの国との戦争、もしくは自分たちと敵対する種族の王などが関係する」

「それも正解。でちょっと補足しとくと、私が言われたのは魔族の王様である魔王を討ち取ってくれて感じた。でもね……」

嫁が沈黙したので、話を続ける。

「たぶん、返す方法。まあ、この場合い召喚されたんだから仮に送還としておくけど、その方法に関してはあいまいな返答しかもらえなかった。その上、まずは使命を果たしてからだとか言われたんだな？」

「本当に……いつも思うけどあんたの頭の中おかしいんじゃないの？これだけの情報でどうしてそこまで想像できるの？」

それはたぶんあなたのお陰かと……あなたのお陰で超自然的なものから人間関係、そのほかにもとてつもなく膨大な数のトラブルに遭遇してきたお陰です。

「……お前のお陰だ……でだ、今日からおれってか、うちの神社は休業だ。おれはお前がそっちに連れて行かれた原因を探る。お前は勇者にさせられないように何とか立ち回れ。んで可能なら勇者召喚の儀ってのがどんなのか調べて連絡くれ」

「なんで電話したかもわかっちゃってたか」

「当たり前だ……お前自身がどうやっても解決できそうもないからおれにも手伝ってほしいってことで電話してきたんだろ。そうでもなけりゃさっさと帰ってくるだろ」

「なんと言いますか……こいつが異世界に飛んだのは初めてではないらしい。」

付き合い始めて数ヶ月目になぜか連絡が取れないことが一週間ほど続いたことがあった……。

嫁の話ではその間に異世界に行って大立ち回りをして、何とか無

事に帰ってこれたとのこと。

はつきりいって荒唐無稽で壮絶に冗談にしか聞こえないが嫁の言葉に一切嘘が感じられなかったことでおれはあっさり信じた。

もちろん、信じることに理解したにはならない。

だからこそ、あっさり信じたし情報もすんなり飲み込んだ。

「そういえば、今回の異世界召喚時にはこちらと連絡とる手段があったのか？」

「今回はなぜか携帯持ってたからね。それを媒介にして連絡取れないかとまず普通に電話したらつながった」

なんと言つかご都合だなおい……。

「まあ、いいや。困ったときには連絡取れるし、何より情報交換しながらこちらでもお前の帰還手段を考えられるしな」

嫁が失踪したとき、嫁の周囲の人間は「ああ、またか」と思っていたようだが、おれ自身は気が気じゃなかった。

友人連中や、家族親類縁者などなどいろいろなところに聞いて回っていた。

帰ってきた嫁に思わずグーパン入れてしまったのはいい思い出…

…いや、嫌な思い出だな。

反撃で半殺しの目にあつたし。

今回はそんなに心配しなくてすみそうだ。

何せおれ自身が関われるからな。

「それじゃあ、夜にでも連絡をくれ。……真姫、無理だけはするなよっ。」

「うん、わかってる。恭一も無理しないで」

お互いにそれだけという電話を切った。

(後書き)

皆さん、はじめまして春夕と申します。

さて、プロットも成しに見切り発車で始めてしまいました！拙い作品ではあると思いますが、感想とかいただけるとすごく喜びます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2950s/>

---

異世界召喚？嫁を連れ戻せ！

2011年4月13日22時40分発行